

**J** **apanese text**

2016年 春/秋号 日本語編

**デザイン**

**デザインラボ**

**文様——カタチ化する力**

文=内田 繁 撮影=西山 航  
協力=消防博物館 (東京・四谷)

p.040

1970年、27歳のときにデザイン事務所を設立した。新築の祝いにと、消防記念会の方々20～30人が、1本の大きな纏まとを持って、事務所と地域一帯を練り歩いてくれた。48本のひらひらした馬簾ばれんが青空を舞っていた様子は、今も記憶に残っている。

もともと纏は戦国時代に敵味方を判別する印だったが、一般的に知られているのはなんといっても江戸時代の火消しのものだろう。とくに町火消まちびけの纏は、64もの組を一目で判別できるよう作られており、デザインとして秀逸かつ美しい。動くことを前提に作られた立体物で、大抵三～四面、あるいは球形をしている。

商店の看板や家紋に見られるように、江戸は視覚文化に優れた都市であった。文字が読めずとも万人に伝わる仕掛けがあった。纏は、その組の地域特性にカタチを与えたものであると同時に、消火への意志や護身の文様も含まれ、人々の祈りをカタチ化したものであるともいえる。消防そのものをカタチにしたといっても過言ではない。

1964年の東京五輪で、世界で初めて体系的に五輪種目のピクトグラムが作られた。その素地がここにも垣間見える。

**町火消しと纏**

木造建築が密集していた大都市・江戸は、世界中のどこよりも火災が多く、なかには5～6年に一度は全焼という地域もあった。とくに人口が多い町人地域を守るための自衛組織が町火消し。64組それぞれが数十人から数百人で組織され、互い火事場での働きを競い合った。組の象徴とも

いえる纏は、重さ約20kg、長さ2m超と巨大で、組一番の力持ち、かつ美男のものが持ったという。纏持ちは火災最前線の家の屋根にのぼり、仲間たちは纏に向かって放水し、また纏よりも風下の建物を壊して、火を食い止めた。写真は1/2サイズの模型。

**二番組 せ組**

将棋の駒の五角形を三面体にし、それぞれの面に組名の「せ」を描いた。上には笠をかぶっている。せ組は京橋周辺の消防を担当した。

**二番組 も組**

江戸時代の分銅型ぶんどうに、三面「も」と描かれている。担当地区は今の銀座周辺。分銅型は両替商などの看板としても使われていた。

**二番組 め組**

楽器の鼓のような形が、籠目かごめで編まれている。籠にすることでサイズを大きく、軽量にできると同時に、編み目が魔除けの文様となる。め組が相撲力士たちと起こした喧嘩は有名で、後に芝居の題材にもなった。

**二番組 す組**

将棋の駒に籠目が描かれ、平仮名の「す」が三方をにらむ。「巢籠の纏」ともいわれる。新富町周辺を担当。

**「江戸の花子供遊び 二番組 す組」**

作=歌川芳虎

**内田 繁 (うちだ・しげる)**

インテリアデザイナー。内田デザイン研究所所長。「人の暮らしを豊かにするデザイン」をコンセプトに、商業空間、住空間、家具、工業デザインから地域開発に至るまで、幅広い活動を国内外で展開している。代表作に、CHARIVARI 57 (N.Y.)、茶室「受庵・想庵・行庵」、門司港ホテル、THE GATE HOTEL 雷門など。メトロポリタン美術館、サンフランシスコ近代美術館、モントリオール美術館などに、永久コレクションが多数収蔵されている。

www.uchida-design.jp

## 建築

### ——内と外をゆるやかにつなぐ「グローブ」

写真＝阿野太一

文＝佐野由佳

p.042

館内に一歩足を踏み入ると、天井を形づくるヒノキの香りが漂う。「ぎふメディアコスモス」は、伊東豊雄氏設計の昨年オープンした岐阜市の複合施設で、写真には2階にある「岐阜市立中央図書館」である。まるで巨大な行灯あんどんのような「グローブ」と呼ぶオブジェがいくつも天井から吊られている。最大で直径14mもあるこの「グローブ」は、トップライトからの光や風を室内に循環させ、ほんのりとした明るさとあたたかさのある居場所をつくる。人々はこの下に集い、本を読み、学び、時に語らう。何かを守られているような、穏やかな場所だ。

伊東氏は「日本の伝統建築がそうだったように、建物の内と外を上手につなぐことで四季を通じて快適な空間をつくる仕掛けを、現代の技術を使って実現してみたかった」という。豊富な地下水を利用した床の輻射冷暖房や太陽光発電なども取り入れ、従来の同規模の建築より消費エネルギーは約半分に抑えられている。休日ともなればたくさんの人が訪れ、思い思いの時間を過ごす。さながらここは町のような賑わいを見せる。

天井のヒノキは、すべて県産材を使用。合板の下地に12cm×2mのヒノキの板を、三角形に互い違いに重ねて組んでいく独自の工法。最大で約42cmの厚さになっており、吸音効果もある。ポリエステル製の布がベースになっている「グローブ」は、布を二重にすることで空気と光の透過度を調節する。テキスタイルは安東陽子氏、書棚や椅子などの家具は藤江和子氏がそれぞれデザインしている。全体は2階建ての低層建築で、四隅を緑で囲むつくり。東の窓からは岐阜市民自慢の金華山が見える。開館半年で、すでに70万人が訪れた（ちなみに岐阜市の人口は約40万人）。

#### ぎふメディアコスモス

1階は市民交流センターなどがあり、2階が「岐阜市立中央図書館」。座

席数は900以上。9:00～21:00（中央図書館は～20:00まで）

火曜休館

岐阜市司町40-5

中央図書館 Tel. 058-262-2924

www.g-mediacosmos.jp

## プロダクト

### ——絨毯の質感に自然の豊かさを見る

文＝編集部

p.044

山形県南東部にあり、約1万5000人が生活する山辺町やまのべまち。江戸時代から織物や染色が盛んであったという素地に加え、1935年に中国より招聘した絨毯の技術者たちの手を2年借り、以降絨毯の町として着々と発展を遂げてきた。技術を高め、感性を磨き、いまやこの町で作られる絨毯は、皇居、歌舞伎座をはじめとした国内だけでなく、海外からも注文が入るほど。

紡績から染色、織り、仕上げまでもすべて一社で行うというこだわりのため、オリジナリティの高い絨毯も比較的容易に生み出せる。山形県出身の世界的工業デザイナー・奥山清行氏とコラボレーションしたUMIという絨毯もその成果のひとつ。微妙な色調を染め分け、合計11色の糸を使い室内に波立つ海を再現した。

建築家・隈研吾くまけんご氏とのコラボレーションから生まれたMORIは、3層からなる毛糸の質感で、樹木が茂り立つ自然の豊かさを表現。「日本の自然の豊かさは、質感そのものの中にある」と語る隈さんの言葉を見事に体現した絨毯である。

#### MORI（ダークグリーン）

— Designed by Kengo Kuma

森の樹木が豊かに茂り立つ様を、3層の毛糸の質感と深いダークグリーンの色彩で表現。

(200×140cm) 39万円

受注生産。他に95×60cmサイズもあり。(以下同)

### ISHI (サンドベージュ)

– Designed by Kengo Kuma

美しい波紋を描く枯山水の庭を再現。

(200 × 140cm) 18万 8000円

### KOKE (モスグリーン)

– Designed by Kengo Kuma

異なる長さの毛足、色、艶で苔の表情を喚起する。

(200 × 140cm) 51万 6000円

### UMI (ダークブルー)

– Designed by Ken Okuyama

ダイナミックな海の一瞬を、色の存在感や動きのあるぼかしで表現。

(200 × 140cm) 38万円

### オリエンタルカーペット株式会社

山形県東村山郡山辺町大字山辺 21

Tel. 03-3297-0666 (東京支店)

info@yamagatadantsu.co.jp

yamagatadantsu.co.jp

## プロダクツ—— 伝承の材を新しい手法で

写真=岡崎良一

文=編集部

### p.045

ホウキモロコシというイネ科の植物をご存じだろうか。江戸の頃から室内箒の主原料となり、モロコシに似た外見をしながらも食用にはならず、ただ箒を作るためだけに畑栽培される。当たりがやわらかいので床を傷つけず、それでいてコシがあるため掃きやすい。室内で靴を脱ぐせいか、小さなチリや傷にうるさいこの国らしいこだわりだ。

しかし今日、国産のホウキモロコシはもちろん、箒職人も激減。かつての産地、神奈川県中津に本拠を構える会社、まちづくり山上<sup>やまじょう</sup>は、2003年にホウキモロコシの種を得るところから始め、その無農薬栽培、美大出身の若手職人の育成、

箒の販売までをトータルで行ってきた。「後世に残る本物の箒を」との信念のもと復活した「中津箒」。時代に即した美しいデザインの箒が、本物の原料と技で作り継がれる。

左から、トモエ箒（山田次郎作、1万円）、山葡萄の枝を柄に使ったミニ手箒（横島梨絵作、8500円）、五つ玉箒 20cm（横島梨絵作、6000円）、ななめ小箒 18cm 3500円・10cm 2300円（ともに吉田慎司作）。小型の物は洋服ブラシや卓上ブラシに。

### 株式会社まちづくり山上（中津箒）

神奈川県愛甲郡愛川町中津 3687-1

10:00 ~ 17:00

月曜・火曜・水曜 定休

Fax 046-286-7572

shimingura-tsuneemon.biz

## プロダクツ—— 内にも外にも花開く傘

写真=鍋島徳恭

文=編集部 協力=和泉亜紀

赤い傘の内側には、目にも鮮やかな糸飾り。桔梗の花を表現したものだという。開けば凜とつやつぱく、白地の模様は梅の花。和傘の産地は現在約5か所あるが、内側に桔梗文様の糸飾りを施しているのは、鳥取県の淀江町で作られるこの淀江傘だけ。良質の和紙と真竹を産するこの地で作られる淀江傘は、ほかの和傘に比べて丈夫で実用性に富み、一時は年間50万本も生産された。しかし戦後、洋傘の普及とともに需要は激減。現在その技を継ぐ者は「淀江傘伝承の会」を残すのみである。

一本の竹から軸や骨をとり、和紙を張って傘を完成させるまでの70以上もの工程は、そのすべてが手作業。800g前後とやや重量はあるが、防水性に優れ、また濡れた面が折り目の内側に入り、周囲を濡らさない。細やかな心遣いと用の美にうならされる逸品である。

上：和紙の強度を増すために、防水用の植物油を乾かす「浜干し」。かつては1万本もの傘の花が砂浜に並んだ。

右：朱色の女傘と、黒の男傘。女傘の白地は梅の花を、男傘の白地は六角形の亀甲文きっこうをそれぞれ表している。円形の模様が多いなか、梅文や亀甲文を用いるのも淀江傘の特徴。各4万円。

#### 和傘伝承館

鳥取県米子市淀江 796

9:00 ~ 16:30

日曜・月曜・祝日 休館

Tel. & Fax 0859-56-6176

(電話は日本語対応のみ)